

時代を見る眼

歴史が求めているものは何か

中嶋嶺雄 ● Mineo Nakajima
● 東京外国語大学教授



時代はいま大きく動いている。しかも歴史の深部の潮流が決定的に変換したのだ。

私はこれを「一九八九―九〇年革命」と呼ぶことにしているが、脱社会主義、脱冷戦という二つの大きな流れを基軸にして、世界はまさに根本的に変わった。その象徴的な表現が去る十月三日午前零時の東西ドイツ統一であったといつてよい。東西ドイツの統一は、東欧の脱社会主義化、そしてそれを是認せざるを得なくなつたゴルバチョフ・ソ連の立場があつたからこそ実現したと言つてよい。一方、そうした東欧の民主化から、最近のヨーロッパにおける全欧安全保障会議による新しい不戦体制の確立は、米ソの歴史的和解、つまり脱冷戦への転換があつ

現代大学生気質——人は人、自分は自分

早稲田大学学生部長
濱口晴彦

豊かな時代に育った現代の大学生——そんな彼らの学生気質は当然昔とは大きく違ってきている。多くの学生たちと日々接している早稲田大学の学生部長に最近の学生気質を伺ってみた。「最近の学生を見ていて気になるのが、“人それぞれ主義”です。これは彼らに私生活のことや物事の考え方について注意したり、聞きたしたりすると、必ずといっていいほど返ってくる“人それぞれですから”という言葉に端的に表われています。」

たとえばA君の考え方とB君の考え方があった場合、A君はA君、B君はB君だからと割り切って、Cという第三の意見を求めようとしめない。要は関わりたくないということなんでしょうね。ですから答えはいつまでたっても平行線なんです。我々の時代でしたら強引にも妥協点というか新たな方向を引き出すことをしましたが、今の学生はそこまではしませんね。人は人、自分は自分という考え方でです。

今の学生にはこの“人それぞれ主義”、裏返していうと“自分だけの快樂主義”というか、そういうものが一貫して流れていると思いますね。それともう一つ気になるのが、“若さ”の発散の仕方です。我々団塊の世代は外に向けて発散したのですが、最近の学生は外に発散しないので内側に向ける傾向が強くなっています。もちろん全部の学生がそうではありませんが、結局、

昔と違って絶対的なイデオロギーがなくなり、個人の選択肢が広がった分、どんなことに若さを費やしているのか、何に夢中になっているのかがわからない。でも、何かを求めている。暗中模索の時代なんでしょうね。たいへんな時代といえますが、興味深い時代に生きているともいえますね。

特に女の子を持つご両親へ

女子学生を持つ親なら、心配の種はいろいろあるが、東京女子大学（みづほ）楓寮では共同生活の利点を活かし、悩みごとや困ったことなどは友達や先輩がすぐ相談にのってくれ、それでも処理しきれなければ東京の母である寮母に相談できるので安心できるらしい。その寮母さんに女の子を持つ親御さんへの具体的アドバイスを聞いてみた。

「第一にアルバイトのことには注意するように言い聞かせてほしいですね。ここは吉祥寺や渋谷、新宿が近いですから、風俗的なアルバイトがとて多いんです。給与面にとらわれてのアルバイトはあとで身を滅ぼすことにもなりかねません。ですから、くれぐれも親御さんもお子さんがどんなアルバイトに行こうとしているのか目を光らせてほしいのです。まだ社会の裏面を知らない年頃ですから、うるさがられても言

こういった時代に生きていく子供を持つ親御さんたちにお願したいのは、何はともあれ自分の子供を信頼してくださいということ。よく、いったいいつ勉強しているのか、何をしているのかさっぱりわからない、という言葉が聞きますが、子供は子供なりにさまざまな壁にぶつかり、多種多様な選択肢から一つを選ぶことによって、人生のいろいろな“勉強”をしているのです。ですから、あたたかく見守ってやってほしいですね」

東京女子大学楓寮寮監
中崎照子

い含めることが大切です。

二番目に、宗教がらみのアンケートやキャッチセールスなどにも気をつけるように教えてやってください。東京ではこの手の悪い誘惑が多いので要注意です。私どもでは新人生が入ってきたとき親御さんに東京の現状を詳しく話しますが、一様に皆さん驚かれますね。もちろん学生たちにもよく言い聞かせます。

三番目は、夜の繁華街です。特にまだ地方から来たばかりの子は、東京の夜の繁華街は一人で歩かないほうがいいのです。私どもの場合、一人で歩けるまで上級生と一緒に歩くとかそれなりに先輩がフォローして一人で歩いても大丈夫なように気を配っています。最初のときに親御さんも身の回りの物を買に行くときに一緒に行くといいですね。街の現状がよくわかりますから」



ベルリンの壁の崩壊

アジアにおける 著しい経済格差

その中国の民主化運動から始まった社会主義解体への動きは、ユーラシア大陸を一巡して、中国の隣のモンゴルにまで及んできている。それだけに中国も、今後数年間のうちには、脱社会主義化の圧力と、日本をはじめ台湾、香港、韓国、シンガポールあるいはASEANの一部の国つまり〈儒教文化圏〉の活力ある経済によって、大陸沿岸から徐々に社会主義体制が浸食されてゆかざるを得まい。このことが世代交代、つまり革命第一世代指導者の退場という問題ともからんで大きな変化をもたらすであろう。場合によると香港が中国に返還される一九九七年七月一日以前に、中国の共産党政権のほうが崩壊するかもしれない。

中国の動揺は、北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)にも大きなインパクトを与えずにはおくまい。今日、金日成独裁体制下で政治的には超安定状況にあるかに見える北朝鮮は、国際的孤立化のなかでいよいよ日本やアメリカなど西側諸国との交流を余儀なくされており、こうして西側の情報ネットワークのなかに徐々に組み込まれてゆかざるを得ない。そのことがチュチェ(主体)

たからこそ実現したのである。

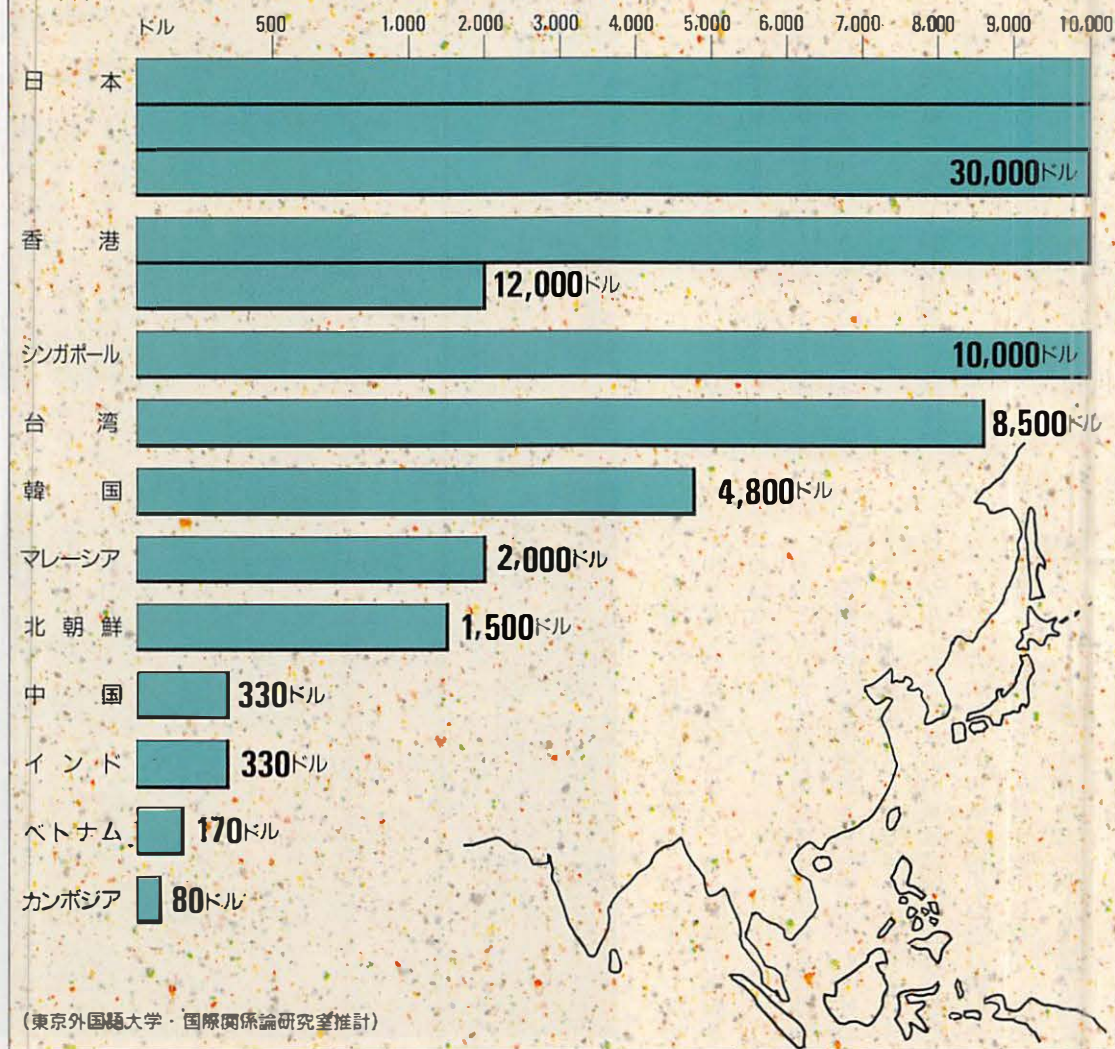
こうしてヨーロッパを舞台とした脱社会主義と脱冷戦の動きが、非ヨーロッパ地域、とくにアジアの国際環境の変化をもたらすものかどうかが、これからの時代の大きな焦点になるであろう。

なぜならば、東欧社会主義の崩壊、ソ連体制解体への動きにもかかわらず、アジアには中国、北朝鮮などの社会主義諸国が残っており、また、ヨーロッパのような安全保障システムが確立する共通基盤に欠けているからである。したがっ

て、脱社会主義化と脱冷戦がこのままアジアの平和と安全には直結しないという問題が指摘されねばならない。

もつとも八九年四月以来の中国の民主化運動は、悲劇的な天安門事件を招いたのだが、逆に考えると、中国のようにはなりたくないという合意がルーマニア以外の東欧諸国には存在したのであり、そのことが東欧諸国の急速な脱社会主義化をもたらしたとも言えなくはない。この点では中国の悲劇が東欧を救ったとも言えるのだ。

アジア地域における一人当たりGNPの格差



思想に基づく北朝鮮の一種独特の社会主義体制——それは社会主義というよりは「儒教的権威主義体制」だと言えよう——を振りくずしてゆくことになるのではないか。

こうして、アジアにおける近い将来の変動は、きわめて大きなものになるであろう。

ところで、アジアの将来を語る場合に無視し得ない問題は、アジア地域における著しい経済的・社会的格差である。東西ドイツ間にも大きな経済格差があり、西欧と東欧との間の経済もその力の差は大きかった。しかし、アジアにおけるほど不均等ではない。たとえば、アジア地域の一人当たりGNPをもっとも新しい数字と比較してみると、日本は約三万米ドルであるのに中国はその約百分の一の三百三十米ドル前後である。こんなに大きな違いがあつては、日中関係がうまくいくはずはない。一方、中国と競合している台湾はもう八千五百米ドルになっており、まもなく一万米ドルの台を越えて先進国入りも間近であり、中国大陸に比べて約三十倍の豊かさである。他のアジアNIEsの香港は一万二千米ドル、シンガポールは一万米ドル、それに韓国もまもなく五千米ドルに達する。これにたいして、北朝鮮は約一千五百米ドルと推定されるが、ベトナム約百七十米ドル、カンボジア約八十米ドルと、アジア社会主義国の貧困

が目立つ。インドは中国とほぼ同様の三百三十米ドル前後、バングラデシュはその半分だが、香港、シンガポール、台湾と、アジアの最貧国との間に、最近躍進の著しいマレーシアやタイなどのASEAN諸国が続き、このうちマレーシアは一人当たりGDP二千米ドルという途上

国から新興工業国へのハードルを近くクリアするであろう。

ソ台・台朝関係の 新たな可能性



繁栄するシンガポールの街並み 写真提供・毎日新聞社

このような格差は、アジア地域の流動性、つまり人の移動、労働力の転換、海外直接投資の流れなどを著しく高め、相互依存関係の拡大による経済交流を活発化し、いわゆるボーダーレス化をもたらす半面、それに伴う摩擦や軋轢を招来するであろう。それだけに、日本外交は時代の要請を鋭く見ぬき、それへの多面的な対応を心がけねばなるまい。こうして、アジアの国際環境は大きく胎動しつつあるが、そうしたなかで、これまでにない新しい国際関係が登場してくるであろう。ソ韓関係や中韓関係は、それまでにない新しい国際関係であったが、近い将来、ソ台関係や台朝関係が出てきそうである。

この点では、日本のマスコミはほとんど報じなかったけれど、ソ連でもっとも人気の高い急進改革派のボポフ・モスクワ市長が去る十一月初旬に台北を訪れ、今後五年間に約六十億米ドルにもものぼる物資買付を約束したことが、きわめて印象深い。こうした動きの中で、北朝鮮も台湾の発展に着目しはじめており、去る十一月下旬、台湾の立法委員に対してはじめて査証を出したことも、小さなニュースとはいえ、きわめて重要であろう。

このように時代は急速に動きつつあり、歴史もまた新しい時代を求めて大きく変わりつつあると言えよう。